

対照言語学から考える日本語教育

大上 忠幸 (大東文化大学国際交流センター)

Thinking about the teaching Japanese from the viewpoint of contrastive linguistics

Tadayuki OGAMI

キーワード

対照言語学 中国の国語教育 (語文) 学習者の背景 歌 看图作文

1. はじめに

日本語教育では以前より対照言語学的知見から教育に活かすための研究が進められている。多くの研究者が学習者の出身国・地域の母語に注目し、日本語との対照言語学の研究を通し、教育に役立てる考察を行なってきた。日本語学習者全体の約半数を占める中国語を母語とする日本語学習者や日本語を母語としない年少者の日本語教育においても、こういった研究や試みは進んでいるが、日本語教育の現場での具体的な実践については、あまり多く知られておらず、共有できていないのが現状である。

伊東(1999)はJSL(第二言語として日本語を学ぶ)児童生徒の日本語教育について「外国人児童生徒に対する日本語教育は、関連する専門分野からの研究成果を多角的に取り入れた総合的アプローチが大切であり、言語教育における研究と実践を通して、一層の推進と向上、そして充実が期待されている」と述べている。対照言語学はもとより、言語以外の異文化間教育や発達心理等といった分野と連携してJSL児童生徒の教育に取り組んでいかねばならないという主張である。

本研究は中国の国語(語文)教育の調査からヒントを見出し、中国語母語話者や中国出身JSL児童生徒の日本語教育の指導法を考察したものである。中国出身の学習者の日本語教育に20年以上にわたり従事してきた筆者の教育・研究の経験を通し、彼らが中国で経験してきたことを活かす教育実践を試み、効果を検証し、今後の教育へ提案できるものを考察した。

本稿では、まず対照言語学を教育に活かすことを再考したうえで、筆者が教育現場で実践および研究協力してきたこと以下の4つを取り上げ、それぞれ検証・考察する。

- ① 中国の語文教育の手法を活かした日本語五十音の指導
- ② 中国の流行歌を用いた日本語の文字指導
- ③ 日本語の歌で中国の歌がもとのものを活用した聞き取り・聞き書きの指導
- ④ 短期留学生の写真や動画とリンクした作文(原稿)の指導(中国の看图作文の応用)

2. 対照言語学再考—対照言語学を日本語教育に活かす

対照言語学の知見を日本語教育に活かすことを考察する上で、まず、対照言語学とは何かを確認したい。石綿・高田(1990)は以下のように定義している。

二つ、あるいは、二つ以上の言語について、音、語彙、文法等の言語体系、さらにはそれらを用いる行動である言語行動のさまざまな部分をつきあわせ、どの部分とどの部分が相対応するか、あるいはしないかを明らかにしようとする言語研究の一分野である。

そして、対照言語学を教育面で活用することについて、佐治・真田(2005)は、外国語と日本語との対照研究についての記述の中で次のように述べている。

特に「外国語としての日本語」教育の面においては、外国人学習者の母語の言語的な問題点だけでなく、文化的背景を含む言語行動、語用、非言語的側面(身振り、態度、学習スタイルなども)の比較対照が行われ、教案作成や教授法に積極的に取り入れられてきている。

対照言語学の出発点は英語教育の現場で英語を教える教師が学習者に如何に効率よく学ばせるか、そのために学習者の母語と目標言語である英語の違いを考えるとということにあった。筆者も日本語を教えるものとして、対照言語学的視点から学習者の母語を含め、学習者の学習スタイル等を、教育に活かしたいと考えてきた。中国語を母語とする学習者に長く関わってきたが、日本語教育の現場においては長年、初期指導や作文教育の方法が課題となっている。とりわけ年少者の教育は厳しく、子どもたちに興味、関心を持たせるものでなければ、効率が上がらない。しかし現在、日本語教育において年少者向けの教育方法を提案したものは少ないのが現状である。

そこで筆者は中国で育った子どもたちにとって興味や関心、モチベーションが上がる指導法について、実際の教育現場で彼らが慣れ親しんだ歌を絡めたものや中国の国語教育で学習してきた識字の学習や看图作文等を試してきた。以下、中国の語文教育の調査結果をまとめるとともに、筆者の4つの教育実践を検証し、明らかになった課題とともに、今後の日本語教育に提案できうるものを考察する。

3. 中国の国語教育の調査—小学校1年生の指導の例を中心に

中国出身者の学習者への効果的な日本語学習を対照言語学の視点から考察する。中国でどのような教育を受けてきたかが鍵となる。ここでは、中国での言葉の教育、すなわち中国の国語(語文)教育において日本語教育で応用できうるものについて調査したものを記す。

3.1 小学校1年生の語文教育

言葉の教育の最も基礎となる小学校1年生の語文教科書及び指導書から語文教育の実際を探る。表音文字でない漢字を使う中国語圏の子どもの母語習得は大変であることが推し量られる。中国の小学校で学ぶ漢字は3,000字（日本は約1,000字）あり、小学校1年でも440字の漢字を覚えなければならない。

学校教育においても言葉の教育に大変力が注がれている。日本の学校の国語にあたる「語文」課は毎日あり、日に2時間設けられている日もある。学校教育において、その時間数は小中の全カリキュラム中2割強を占める（資料1）。

【資料1：中国の小学校1年生の時間割】（『聴く小学生の中国語』より）

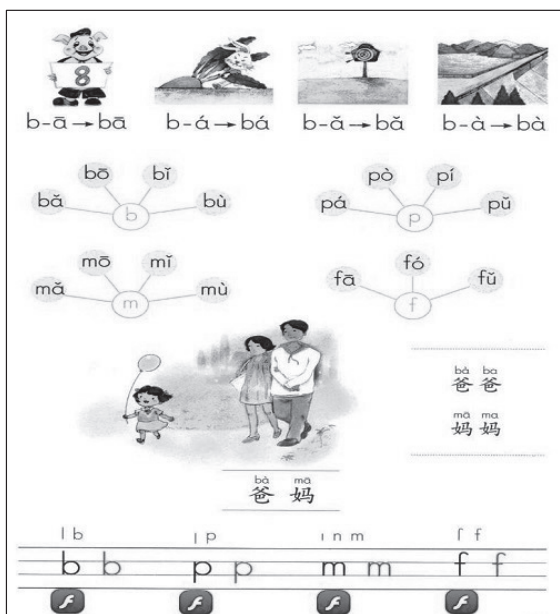
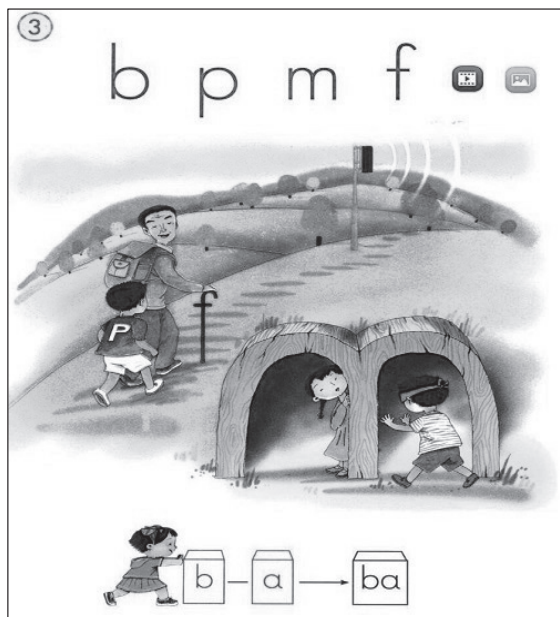
	月	火	水	木	金
1時間目	数学	数学	数学	語文	語文
2時間目	体育	語文	語文	数学	数学
3時間目	語文	芸術	英語	語文	体/健
4時間目	英語	芸術	語文	体育	品德
5時間目	英語 或 写字				
6時間目	語文	体育	品德	芸術	芸術

3.2 文字（ピンイン）の学習

小学校1年生の語文は、実にたくさんの学習項目がある。まず、漢字学習の前に、拼音（ピンイン）と呼ばれる中国語の表音記号（ローマ字で表記）を学ぶ。アルファベットを覚える方法として、日本では「きらきら星」のメロディーにABCを乗せて歌いが広く知られているが、中国のピンインを覚えるために、「字母歌（ズームグー）」という歌がある。子どもたちの多くはこの歌に合わせてA・B・C…（ピンインの読みはア・ボー・ツ…）の発音・表記を学ぶ。日本のひらがな学習と同様で、小学校に上がる前の幼稚園や「学前班」とよばれる就学前教育のクラスで既に学んでいる場合が多い。

小学校でのピンインの学習は、上述のような歌や言葉遊びに絡めて発音を練習することから入り、表記、単語や文の写字の学習へと移っていく。日本の五十音図にあたるピンインの音節表（中国語を学んだことのある人なら必ず目にするもの）は、言うならば「420音図」ともいべき米粒のようなローマ字がぎっしり並んだものであるが、この内容を1年生の最初の段階で声調（音調アクセント）として四声も加えて聞き取り、書き取れるようにならなければならない。

そして、このピンインの学習が一通り終わったあとに漢字440字を学ぶ。ピンイン・漢字ともに、授業では聴写（ティンシエ＝聞き書き）や黙写（モーシエ＝暗誦した文章を思い出して書く）とい



資料2：人民教育出版社-小学1年語文教科書

った学習が重視されている。すなわち中国出身の語文の授業を受けた子どもたちは、日本語教育におけるディクテーションの学習活動（＝中国語では聴写）の形態や暗記の学習には慣れているといえる。

この約420のピンインの音節および四声の声調（アクセント）を聞き分けられないことには中国語を文字に表すことができない。そこで徹底して小学校1年生の1学期（前期）の間（特に最初1ヶ月）に中国語の音をピンインで聞き分け、ディクテーションできるように学習する。その後すぐに、あわせて漢字でも書けるように漢字が導入される。北京出版社の教科書の場合、1年生の最初の教科書である第1冊（上）は、指示の文も全てピンインで書かれており、「ピンインを覚える」との一貫した姿勢が表れている。第1冊（下）からは漢字が出現するが、1年生のテキストは漢字の上に全てピンインがふってある。

前述の通り、もちろん「420音図」ともいべきピンインの音節表は、約420個あるといっても、日本の五十音のように1音1文字の420種類の仮名文字があるわけではない。アルファベット26文字のうちVの1字だけを除く25文字のアルファベットの組み合わせで書き表される。具体的には21の子音（声母）が縦軸に並び、横軸には「6つの主要な母音」を中心に「二重母音」「三重母音」等（韻母）が並ぶ。この声母と韻母の組み合わせで約420の音節が出来上

がっており、このピンインで中国語の音がすべて表記可能になる。

中国の子どもたちはこの音節表の配列に基づき、新出漢字等の読みは声母と韻母を組み合わせで学んでいく。例えばbaは、b+a → ba（ぶ+あ→ばー）という形で教わっている（この場合、「ブア」という音にならない。「バー」と発音する）（資料2）。

北京出版社の教科書の場合、1年生の語文における学習は、一通り中国語の音をピンインで表せるようになったら、ピンインで書かれた文章（一見、英語やスペイン語等の欧米言語の文に見間違える）を読み（＝閲読の基礎）、その後、漢字を学んで漢字で書かれた文（漢字の上にピンインが振ってある）を読むという学習活動を展開していく。人民教育出版社の教科書の場合、ピンインの学習と並行して少しずつ漢字を導入し、簡単な文章も学んでいく。

中国の子どもはピンインの学習とともに、小学校1年生から440字もの実に多くの漢字を学ぶが、漢字をいかに覚えさせるか、すなわち、いかに教えるかが中国の語文教育の最重要課題であり、永遠の命題であるといえる。そのため、様々な工夫が凝らされている。特に子どもたちに覚え方を自ら考えさせること、発見させることに重きを置いている。

驚くべきことに、小学校1年生の漢字指導の開始と同時にその形の特徴（点、はね〔＝钩（ゴウ）〕、はらい〔＝撇（ピエ）〕等）を教える他、偏や旁といった部首もすぐに導入している。そこには漢字の特徴を掴ませることによって多くの漢字を覚えるストラテジーを身につけさせる狙いがある。

多くの語文の教師が参考になっている『指導書』やインターネットのウェブサイト『語文網』には、漢字を覚えさせるための工夫した教え方を数多く掲載している。ウェブサイトの授業記録においても、新出の漢字の覚え方について、クラスをグループに分けて、そのグループで覚え方を話し合い、それを発表し皆で共有するといった授業が紹介されている。以下、一部を取り上げ考察する（括弧内は筆者による日本語訳）。

◎語文網（＝国語ネット）のホームページ「**人教版第三册《识字5》的写字教学**」

（＝人民教育出版社第三册（＝2年生・上）《識字5》の文字教育）より

●**引导学生牢记汉字、为书写训练扫除障碍**（＝児童に漢字をしっかりと心に刻むようにさせ、書くための障害を取り除く訓練をする）

1. **开展游戏活动、复习巩固字音**

（＝ゲームを取り入れた活動で、文字の発音・読みを固める復習をする）

利用课件开展“摘气球”的游戏活动、通过开火车或小组竞赛的形式、引导学生复习要求会写汉字的读音。（＝教具を使って風船をつかむゲームやグループに分け電車を運転するゲームで競わせる形で児童に漢字の読み・発音を書かせる）

2. **依特点想方法、灵活记忆字形**

（＝特徴をとらえ、弾力的に字の形を記憶する方法を考える）。

先让学生根据汉字的特点、独立思考识记字形的方法、然后组织学生进行交流。

(=まず児童に漢字の特徴に基づいて、一人で字の形を覚える方法を考えさせ、その後、児童同士で意見交換をさせる)

3. 指导组词说话、巩固汉字记忆

(=語の組み合わせの話をし、漢字の記憶を固める)

在识记汉字音、形的基础上、让学生充分地进行组词练习、并有针对性地选择一些常用词引导学生进行说话训练。

(=漢字の音や形の基礎の上で、児童に十分に組み合わせる練習をさせ、適切にいくつかの常用語の選択をさせ、児童に話す訓練をさせる)

◎北京師範大学出版社のホームページより

1年(下) [伴你教语文] 看图识字(之二) (=絵を見て字を学ぶ(その二))

●教師操作课件, 学生观察, 想一想怎样记住字形 (=教師が教具を使って児童にはどうやって字形を覚えるかをよく見て考えさせる)

●熟字加部首, 编编顺口溜……

(知っている字に部首や語呂合わせのような韻文を加えさせたり……)

●熟字换部件, 形近字比较……

(=知っている字のパーツを変えさせたり、形の似た字を比較させたり……)

交流记字法 [=字の覚え方を交流する]。

生1: “英” 可以用熟字加部首的方法记。“央 + 艹 = 英”

[児童1: “英” は知っている字に部首を加える方法があります。「央に草冠で英」です。]

生2: “纪” 可以用熟字换部件的方法记。“记 - 讠 + 纟 = 纪”

[児童2: “紀” は知っている字の一部分を変える方法があります。「記ひくゴンベンたすイトヘンで紀」です]

生3: “念” 可以用编编顺口溜 (語呂合わせ言葉遊び) 的方法记。“今几个心里想妈妈, 打个电话说思念……”

[児童3: 「念」は語呂合わせの方法で覚えます。「今って子が心の中でお母さんを思って電話して思念(スーニエン=想い慕う)……」って言います]

生4: “园” 可以用形近字比较的方法记。“公园——汤圆”; 也可以用编编顺口溜的方法记: “两个儿童逛公园”; “方方的‘园’里一‘元’钱、买张门票逛公园……”

[児童4: “園” は形が似ている字を比べる方法で覚えます。「公園(公園)」—「湯圓(汤圆、タンユエン=米だんご)」(筆者注: 中国の漢字ではクニガマエの中身の漢字は同形で同音の元で

ある)。また、語呂合わせの方法でも覚えます。「子どもが2人、公園で遊ぶ。四角い‘園’の1‘元’の、チケット買って遊ぶ」(※筆者注「儿」は児童の児の簡体字で子どもを表し、二人の「二」と合わせて「元」の字を指している)

このように、中国の小学校では、漢字を覚えるために様々な取り組みを行なっている。ゲーム性を取り入れた活動や、児童に漢字の特徴を捉えさせ、その特徴に基づいて、字の形を覚える方法を考えさせる活動、さらに、個々の覚え方を児童同士で意見交換させるという活動もあり、大変興味深い。

北京出版社の教科書においては、基礎的な漢字の指導が終わると、次は語彙、短文、文の指導という流れになる。人民教育出版社においては、ピンインの学習と並行して少しずつ漢字を導入し、簡単な文章も学んでいくが、1年生の教科書(上)においては、漢字一文字一文字の上にピンインがふってある。20単元ある中で、最後の2つの読みもののみ、ピンインがふられていない漢字のみの文章である。現在は、人民教育出版社のシェアが60%以上であり、ピンイン学習と同時に漢字、文、短文を学ぶといった流れのほうが主流になっている。

以上、中国の語文教育、特に文字の指導について概観してきたが、中国出身の学習者を指導する際、学習者が中国で慣れ親しんだ学習の方法を知り、それを活かす指導を工夫することによってより効率的な指導ができると考えられる。

4. 日本語教育現場での対照言語学視点での中国での経験を応用・実践した取り組み

4.1 中国の語文教育の手法および中国での経験を活かした日本語の初期指導

第3章で述べた中国の語文教育を日本語教育の現場で中国出身の学習者の指導に応用した取り組みを以下、紹介する。

4.1.1 五十音図の発音の初期指導

前述のとおり、中国の小学校では新出単語等は全て「母音と子音の組み合わせ」例えばb-o→bo(ぶーお→ぼ)という形で教わっている。そこで、日本語の五十音の練習も中国で慣れ親しんだ“子音+母音”の配列で並んでいることに気づかせてあげると安心して(コツをつかんで)学べる。

実際の日本語の五十音の指導の導入において、以下のようなものが考案する。ただし、日本語の五十音の発音において中国語の発音では表せないものもあるので、あくまで導入においてのみの方法である。つまり、日本語の「か」は中国語の「ka」に近いといった指導方法である(※にすぐ上の行の日本語に対応させる中国語で当てるものを記した)。

- ①最初に母音 「あ」「い」「う」「え」 「お」
※中国語の母音「a」「i」「u」「eiのe(=iを抜く)」「o」
②次に子音 「か」「さ」「た」「な」「は」「ま」「や」「ら」「わ」「が」「ざ」「だ」「ば」「ぱ」
※中国語の子音「K」「S」「T」「N」「H」「M」「Y」「L」「W」「G」「Z」「D」「B」「P」
③そして②+①で学ぶ
例. 「く+あ→か」(K+a→か)

中国の語文での学ぶ順序に則った順序で行っているため、日本語五十音の法則性をとらえ早く覚えられ、という点で一定の効果が見られる。ただし、前述通り中国語では表せない発音については注意が必要であり、この指導法は教える側に中国語の知識がないと危険性をはらむ。なお、中国語の子音に「Y」と「W」を便宜上入れているが、実際は子音ではない。ただ、中国語のピンインでも用いられ、教科書にも「Y」と「W」は入れられているので、ここにいれても問題ないと判断できる。実際、中国出身の学習者は子音的に捉えられ理解できる。

4.1.2 文字のディクテーションの指導

実際の指導においては、ディクテーションのときに、このとらえ方をもとに教員からヒントを出した。以下、「もも」を書く際の指導を紹介する。

- ①教師：「マミムメモのモですよー」 → 生徒「んー」(書けなくて困る)
②教師：「まみむめも…ム・オ、モのモですよ」 → 生徒「あっ！」(書けた)

日本語教育の現場において、よく教室に貼られている凡人社の五十音表はローマ字も付記されているので、この方法は比較的有効である。

4.1.3 拗音の初期指導

この「子音と母音を組み合わせる」という教え方は日本語の拗音の指導にも応用が効く。

- ①まず、右手を大きく開いて(ジャンケンのパーの形で)「き」と発音
②次に、左手を握って小さくして(グーの形で)「ゃ」と発音。
③最後に、右手と左手を引っ付けながら「きーや、きゃ」と発音する。

日本語学習者の多くは、日本語の特殊音の習得が困難であると感じている。その中の一つである拗音については、この指導法で「一つの音節で発音するもの」と捉えさせることができる。拗音は2文字で書くが、1つの音であるということが分かる指導法である。中国出身の学生だけでなく一定の教育効果が見られる。

4.1.4 漢字の指導—対照言語学の応用から

中国では漢字をたくさん覚えなければならないが、漢字を覚えるために、様々な工夫がされている。特に小学校では子どもたちに覚え方を自ら考えさせるということに重きを置いている。漢字指

導の開始と同時に、習う漢字の形の特徴、すなわち、「点」や「はね」（钩=ゴウ）、「はらい」（撇=ピエ）等を教える他、偏や旁といった部首もすぐに導入している。

中国語母語話者への日本語教育の文字の指導において、学習者がどのように漢字を覚えてきたかを把握すれば、指導に応用が効く。

特にJSL（第二外語として日本語を学ぶ）児童生徒の指導では、指導方法が工夫できる。彼らは日本の学校で日本の児童生徒同様に学んでいくことになるので正確な漢字を書くことが求められる。

一つの例としては「はねるか、はねないか」に注意して覚えることが挙げられる。「はねる、はねない」を中国語では“**带钩**（タイゴウ）？**不带钩**（プタイゴウ）？”というが、この言葉さえ知っていればすぐに出来る指導である。

例えば、「才能」の「才」等の「はね」があるものを教える際に「はねる？」（**带钩**=タイゴウ）「はねない？」（**不带钩**=プタイゴウ）と尋ねつつ、学習者の書いたものをチェックする。

もちろん。この指導法は大学等の漢字圏と非漢字圏の学習者が混合するクラスの漢字の指導では注意が必要である。ただこういったクラスにおいて、漢字圏の学生が「漢字は大丈夫」と言ってあまり学習に熱心ではない場合に、このように細かい部分を教員が中国語で注目させることにより、このような学生の学習熱を上げる効果がある。他にも中国の漢字と日本の漢字の差について、意味の異なるものに注目したり、それを学生に説明させたりすることも有効である。日中の漢字の違いが分かること、それについて教員が興味を示すことが中国語母語の学習者の漢字学習のモチベーションアップにつながる。日本の漢字と中国の漢字で字形が微妙に違うものについては、日本語教育に長く携わっている現場の教師による著作（伊奈垣 2015）もあり、参考になる。

4.2 中国の流行歌を用いた日本語の文字指導

20年ほど前、筆者は公立の小学校で中国出身児童に日本語を教えていたが、日本語教室という日本語を教えるための専用の教室を使用していた。その教室の中の壁に貼っていた「あいうえおの歌」の文字入りの絵を指さしながら、ひらがな五十音を教えた。その際、当時中国で流行していた歌の節にのせて指導した。対象は中国から日本に来たばかりの来日数日から1、2カ月の児童2～4名であったが、当時、数年前に中国で大流行していた歌“小芳”のメロディをひらがな五十音学習用の「あいうえおの歌」に乗せて（替え歌の要領で）歌うことにより、日本語の音声の特徴を捉えさせつつ、文字の定着をはかった。具体的には以下の通り（抜粋）である。中国語の歌詞（漢字）に対応させた日本語の歌詞（ひらがな）は、一つ一つの漢字に合わせて真下のひらがなを当てはめて歌うことを指す。

村 里 有 个 姑 娘 叫 小 芳
あ ひ る の あ か ちゃん あ い う え お

长得好看又善良
かきのみ くりのみ かきくけこ

一双美丽的的大眼睛
ささのはさらさら さしすせそ

辫子粗又长
たいこを たたいて たちつてと

(中略)

谢谢你给我的爱
らんぶに ろうそく

今生今世我 不忘怀
らりるれろ らりるれろ

谢谢你给我的温柔
わらって わになる

伴我度过那个年代
わい うえを わい うえをん

日本語を母語とする児童への指導であれば、「あひるのあかちゃん あいうえお」と普通に音読するか、日本の伝統的な童謡(例えば、「でんでんむしむし かたつむり」で始まる「かたつむり」)の節に乗せて歌って指導するかどうかであるが、中国から来た子に「かたつむり」は分からない。そこで「小芳」に乗せて歌ったところ、きれいにきちんとはまった。子どもたちも大変喜んで生き生きと歌い、一気に五十音を覚えることができた。

対照言語学的な視点で中国語と日本語を見比べれば、中国語の音節は、ほぼ漢字1個に1つになるのに対し、日本語の音節は「きゃ、きゅ、きょ」といった拗音や「ん」の撥音といった特殊音等を除き、ひらがな(カタカナ)1つに1つになる。こういったことを、日中両言語の歌詩を持つ歌うことで感覚として掴ませる意図をもって指導した。上記の歌詞の対照において、中国の漢字1つに日本語のひらがな1つという対応は、完全に一致する箇所は冒頭の「村里有个」(漢字4つ)と「あひるの」(ひらがな4つ)および「今生今世我」(漢字5つ)と「らりるれろ」(ひらがな5つ)の2箇所しかない。しかし、歌で日本語の特徴を捉えさせる日本語の指導法を実践する上で、中国語母語話者が知っているメロディを使うのは対照言語学の知見を活かした大変有効な方法であることがうかがい知れる結果となった。

4.3 日本語の歌で中国の歌がもとのものを活用した聞き取り・聞き書きの指導

10数年前、筆者がテレビをつけて他の用事をしているとき、何となく聞き覚えのある、しかし初

めて聞く歌が流れていた。テレビ番組はNHKの「みんなの歌」だった。不思議に思い、テレビの画面を注視し視聴していると「米はネズミを好きじゃないものね」という歌詞の字幕が出てきて、中国で聞いたことのあるメロディーが子どもの声で日本語で歌われていた。そこで初めて中国の大流行した“老鼠爱大米の日本語版「ねずみは米がすき」であることが分かった。これを早速日本語教育の教材に使えないかと模索した。1つは日本の教育施設において中国出身の中学生・高校生に、もう1つは中国において大学の日本語学科の大学生に、日本語の歌を聞いて歌詞を聞き書きをする練習を行った。日本語の歌といっても、もとの歌は中国のヒット曲であるため、学生たちは聞いている途中、原曲が中国の歌であることに気付いたが、慣れ親しんだ歌ということもあり、一生懸命聞き取り、聞き書きに取り組み、楽しく書く練習ができた。歌詞の日中の対照は、前述の4. 2同様、中国語の歌詞（漢字）に日本語の歌詞（ひらがな）を合わせて以下に表記する。

我听见你的声音 有种特别的感觉

ありえないって わかあってるから

让我不断想 不敢再忘记你

いつもとおくで みているだけ

(中略)

我爱你 爱着你 就像老鼠爱大米

ウォアイニー きっと かなわぬゆめね

不管有多少风雨 我都会 依然陪着你

こめはねずみを すきじゃないものね

多想你 想着你 不管有多么的苦

ウォシャンニー だけど あなたがすきよ

只要能让你开心 我什么都愿意 这样爱你

これからも ずっと だい すきだよ またあした

中国語の歌詞と日本語の歌詞を対照してみると、前述した「中国語1漢字」に「日本語1ひらがな」が、ほぼ対応していることが分かる。促音の「っ」も1音節で当てはめられていることが多く、中国語母語話者が日本語学習で困難と感じるこのような特殊音も、歌を通して意識でき、声に出して歌うことで身につけられることも期待できる。

中国の大学の日本語学科での取り組みは、1年生から4年生までが集合しての特別講義の最後に行なった。クイズ形式に試したが、最初に何の前触れもなく日本語の「ねずみは米がすき」を一度流した後、模造紙に歌詞を書いたものを黒板に貼り、再度聞き、ブランクに何が入るか考えるクイズをした。(以下、クイズ。日本語に対応する中国語を右に記す)

- a. いつも遠くて 見ている (○○) ← 让我不断想 不敢再忘记你
- b. (○○) なんて できるわけない ← 不管路有多么远 一定会让他实现
- c. 我爱你 (○○○) かなわぬ夢ね ← 我爱你 爱着你 就像老鼠爱大米
- d. (○○○○○○) を好きじゃないものね ← 不管有多少风雨 我都会依然陪着你
- e. これからも (○○○) 大好きだよまた明日 ← 只要能让你开心 我什么都愿意 这样爱你
- f. このまま (○○○) 好きでいたいいつまでも ← 只要能让你开心 我什么都愿意 这样爱你

受講人数が多かったため、代表チーム（1～4年生が平等に混ざる）に解答権を与え、答えてもらったが、受講者全員にも考えてもらった。代表チームで正解が出なかった場合、全員に解答権がわたり、早く挙手した人に答えてもらった。自然にピアラーニングの形式になり、それぞれの答えについて話し合い盛り上がった。

しかし、日本の教育施設での中国出身の中学生・高校生のクラス、中国の大学の特別講義ともに、10年ほど前の実践であるため、現在、同曲を使用しても同様の効果は期待できない。実際、3年前に同曲を用いて中国の大学で行なった特別講義では、ある学生から「老歌」（懐メロ）だと言われた。つまりこの曲では興味が沸かない学生も少なくなかったといえる。時代に合った学生の興味を引くものを教材として選定し、準備しなければならない。

4.4 短期留学生の写真や動画とリンクした作文（原稿）の指導

本年度（2017年度）の夏休み期間、台湾の大学から10名の学生を3週間の短期留学（うち実質2週間が日本語研修）を受け入れたが、中国の看図作文を応用した写真や動画とリンクした作文（発表原稿）の取り組みを実施した。自分自身が短期留学中に体験したことを、写真や動画とともに日本語で説明（字幕等）するというもので、日本語の発表原稿を作文するというものである。

台湾や香港においても中国同様、小学校から高校まで看図作文が用いられていて親しみがある、さらに現代の大学生がSNS等で写真や動画に言葉を添えているアップしていて興味・関心が沸くと考えをこの取り組みを実施した。ここでは、その概要と結果を記す（この教育研究の詳細については、別の機会にする）。

日本語の研修は、1週目に基本的な文型を学習し、2週目は毎回異なるテーマでグループワークで話し合いをし、翌日、黒板に書くかパソコン（スライド）で発表するという流れの学習を日本人学生ボランティアと共に行なった。学生には日本語研修の1週目の終わりに、「研修の最後に行なう研修発表会で短期研修を振り返ってのムービー（字幕を付ける）を作る」と告知した。

学生は全員で10名。学年は新2年から新4年まで多様であった。出身地別では台湾が8名、浙江が1名、香港が1名だった。日本語学習歴については、半年が3名、1年が6名、2年が1名だった。来日経験を聞くと、無しが3名、有り7名（うち1名は計6回）だった。日本に何度も来ているという学生はモチベーションが高く、積極的に日本語を話したが、ほとんど日本語を学習したことがないという学生もいて、レベル差が大きかった。小中高での看図作文の経験を聞くと、10名全

員が有ると答えた。SNS（Facebook や Instagram 等）については 10 名全員が登録しており、「写真や動画に一言添えている」が 7 名いた。一言添える言語が何語かとの問いには、中国語のみが 4 人、日本語のみが 1 人、英語と中国語が 1 人、中国語・英語・日本語が 1 人だった。予想以上に台湾の大学に学ぶ学生が SNS に積極的な参加していることが分かった（実施アンケートは最後の頁＝資料 3 に付記）。

研修の最後に行なった研修発表会のムービーについて、作成に費やした時間は 1 人平均 4 時間（各々 3～5 時間）で、発表のムービーの日本語字幕や発表原稿を作るときの日本語は、「全部自分で」3 人、「日本の友人に見てもらって」が 3 人、「翻訳ソフトを使って」が 2 人、「自分および日本の友人に見てもらって」が 1 人、「日本の友人と翻訳ソフトの力を借りて」が 1 人だった。

10 人全員が 2 分程のムービーを作成し、研修発表会ではホールの舞台上がって少し挨拶した後ムービーを上映した。学生はみな概ね満足していた様子だった。現代に生きる若者らしく、写真や動画の映像を上手く取り入れ、日本語もほとんどの学生が録音したものを作ってきた。日本語の（構文や発音等の）良し悪しには差があったが、映像や字幕の助けもあり、日本人の学生等の聴衆もみな理解できるレベルになっていた。

ムービーを発表しての感想（自己評価）は以下の通りだった。「大変良かった」が 1 人で、理由は「一生懸命に作って、良い作品ができたので」だった。「良かった」が 1 人で、理由は「川越の写真はとても綺麗、でも字幕がありません」とのことだった。「普通」が 6 人で、理由としては「PC トラブルで発表の時間が遅くなってしまった」、「まあまあです。動画はすらすらじゃない」、「写真を選択することよくないです」、「私はあまり日本語が上手じゃありません」、「時間不足」としていた。「良くなかった」は 2 人で「あまりうまく日本語が読めなかった」、「内容と時間不足」を理由に挙げている。

今回の看図作文を応用した写真や動画とリンクさせた短期留学生の作文（発表原稿）の指導は、「対照言語学の教育面での活用」として佐治・真田（2005）のいう学習者の「文化的背景を含む言語行動、語用、非言語的側面（身振り、態度、学習スタイルなども）」を活かせるものとなり、ライフスタイルにも合い、「書く」（表現したい）モチベーションが上がって積極的に取り組めたといえる。すなわち、学生たちにとって「書く」意味のある活動になったと考えられる。ただし、狙い通り、学習した文型、語彙を用いて作文する学生もいた一方、翻訳サイトや翻訳ソフトを使用する学生もいたという新たな課題も生まれた。

5. 今後の課題とまとめ

本研究は対照言語学の知見から日本語教育を考える、とりわけ中国で育った学習者や子どもたちの教育や生育、経験を活かすことを考え、教育実践の中で検証したものである。中国の国語教育の文字指導や看図作文を応用し、日本語教育の五十音指導や作文の指導で活用した他、中国の歌を文字や聞き書きに活かし考察した。結果、対照言語学の知見を活かすことで教え方は大きく変えられ、

学習効果が上がることが分かった。

中国の語文教育の調査から、90年代以降の「素質教育」の発展、2001年中国国家教育部(=日本の文科省に相当)公布の「基礎教育課程改革綱要」、さらに「教学大綱」に加え「課程標準」(日本でいうところの指導要領)の制定といった大きな教育の改革の影響を受け、教科書の中身はもちろん教育実践にも様々な変化が現れていることが分かった。

識字、閲読、作文の中身も変わってきているようだが、「口語交際」という日本でいう「音声言語」の教育が単元に多く加わり、従来の語文教育の発想とは全く違う授業を組んでいかざるを得なくなっている。経済発展のための人材輩出の教育を掲げる中国は今後も言語技術の力を重視する教育を継続していこうが、こういった流れも無視できない。

また中国で教える日本人の日本語教師は中国の大学、高校等の作文の授業を担当している事が多いが、自分自身が日本の学校教育で受けてきた日本式のもの、授業においてもそのままに近い形で行ないがちになる。対照言語学の知見を取り入れ、中国の学生が慣れ親しんできた作文の手法、例えば看図作文を行なう発想は日本人には、まず思い浮かばない。日本語をたくさん書く、作文を嫌がらずに楽しく書くということが第一義とするならば、教師が中国式の作文について知り、活用できるものがあれば活用することが学習者の日本語能力向上につながるであろう。

学習者が受けてきた教育や育ってきた背景をより深く知り、さらに中国・日本だけでなく、各国の事情を学び、学習者にとってより効率のよい学びを考えていかなばならない。

本稿では中国語を母語とする学生の母語および出身国での学習・経験してきたことに注目し、対照言語学的視点から考察した指導法については検証したが、中国以外の教育の研究については考察していない。その他の国・地域の研究者と教育実践従事者が連携し、さらなる教育の向上をしていくことが今後の課題である。

参考文献

- 石綿敏雄・高田誠(1990)『対照言語学』おうふう
- 伊東祐郎(1999)「外国人児童生徒に対する日本語教育の現状と課題」『日本語教育』100号
- 伊奈垣圭映(2016)『ちがいがわかる対照表 日本の漢字 中国の漢字』水山産業株式会社
- 大上忠幸(2007)「JSL 児童生徒の日本語教育における『書くこと』の指導—中国語を母語とする児童生徒を中心に」東京学芸大学博士論文
- 大上忠幸(2008)「出身国で受けてきた教育を活かす JSL 児童生徒の『書くこと』の指導」『日本語教育学会世界大会 2008 予稿集 1』(291-294 頁) 大韓日語日文学会
- 大上忠幸(2017)「作文教育再考—中国の『看図作文』からの示唆」大東文化大学紀要第55号〈人文科学〉
- 佐治圭三・真田信治(2007)『言語一般』東京法令出版

田中智生（2002）「中華人民共和国の国語教育」『国語科系教科のカリキュラムの改善に関する研究
—歴史の変遷・諸外国の動向—』教育課程研究センター

<http://www.nier.go.jp/arimoto/Recent/Curriculum/CrcIndex.html>

張一帆編（2005）『聴く小学生の中国語』日中通信社

宮島喬・太田晴雄（2005）『外国人の子どもと日本の教育』東京大学出版社

南本義一（1995）『中国の国語教育』溪水社

北京教育局教学研究部編（1996）『语文教学参考书第一册』北京出版社

北京教育科学研究院（1997）『语文第一册（上）・（下）・第2册』北京出版社

课程教材研究所（2004）『语文一年纪老师教学用书』人民教育出版社

北京教育科学研究院（1997）『语文第一册（上）・（下）・第2册』北京出版社

人民教育出版社小学语文室编著（1995）『语文第二册』人民教育出版社

北京景山学校（1989）『语文第二册』原子能出版社

秦训刚・晏渝生主编（2003）『语文课程标准老师读本』华中师范大学出版社

人民教育出版社小学语文室编（2001）『语文第一册』～『语文第十二册』人民教育出版社

人民教育出版社综合编辑室（2005）『素质教育新学案 语文三年级下册』人民教育出版社

小学课本网（2016）（汉语拼音 1-8| 教育部审定 2016 新人教版小学一年级语文上册课本）

<<http://appxxkb.szxxuexiao.com/html/7283.html>> （2017年9月14日アクセス）

【資料3】

アンケート 氏名 ()

1. SNS (Facebook や Line、Instagram 等) に登録していますか。 はい いいえ

【以下、「はい」の方のみお答えください】

- (a) 積極的に発信していますか。 はい / いいえ
(b) 写真や動画をアップしていますか。 はい / いいえ

【以下、「はい」の方のみお答えください】

- (c) 写真や動画に一言添えていますか。 はい / いいえ

2. あなたは出身国・地域の小学校・中学校・高校で、授業で「絵や写真を見て作文する」というものがありましたか。

- a. はい / b. いいえ

【以下、「はい」の方のみお答えください】

どんな割合で（1年に何回）やっていましたか。

- | | | | | |
|----------|------------|------------|------------|-------|
| 小学校1～3年： | a. 1年に1～3回 | b. 1年に4～6回 | c. 1年に7回以上 | d. 無し |
| 小学校4～6年： | a. 1年に1～3回 | b. 1年に4～6回 | c. 1年に7回以上 | d. 無し |
| 中学校： | a. 1年に1～3回 | b. 1年に4～6回 | c. 1年に7回以上 | d. 無し |
| 高校： | a. 1年に1～3回 | b. 1年に4～6回 | c. 1年に7回以上 | d. 無し |

3-①. いつから日本語を勉強していますか。 ⇒ 20____年____月 から

3-②. 日本に来たことはありますか。 ⇒ はい いいえ

【以下、「はい」の方のみお答えください】

3-③. いつですか。 ⇒ 20____年____月 (____日間)

アンケートのご協力ありがとうございました。

(2017年9月29日受理)